

口頭発表

動物を活用した活動における評価指標について： ウマの注視時間に関する検討 II

土田あさみ^{1)*}・横山 直²⁾・木本直希²⁾

- 1) 東京農業大学農学部バイオセラピー学科
2) 東京農業大学農学部バイオセラピーセンター

An evaluation index in activity using animals: Investigation about children's horse-gazing duration II

TSUCHIDA Asami¹⁾, YOKOYAMA Nao²⁾, KIMOTO Naoki²⁾

背景・目的

我々はこれまで小学生対象の体験活動の情報をもとに、よりよい活動を行なうための活動評価指標について検討してきた。すでに本学会第6回学術大会にて、ウマにニンジンを与餌する際の小学生児童のウマを注視する時間について若干の報告を行なった。ウマ注視時間は、ウマに餌を給与することを目的としているか、あるいは、給与するという行為だけを行なっているかという視点で着目した。すなわち、ウマに興味を持った児童はウマの注視時間が長い傾向にあると仮定して、注視時間が小学生児童の活動への興味を推し量る指標となりうるかどうかについて検討してきた。これまでのところ学年、性別、給与時に児童のそばにいた人員等によって注視時間に有意な差はなく、作業に集中していた児童では注視時間が長い傾向にあること等が明らかで、さらに、注視時間は年間を通して変動があることが示唆された。そこで今回これに例数を加えて再度ウマ注視時間について検討し、ウマ注視時間が活動の指標となりうるかどうかについて考察した。

方法

1. 調査対象の児童：2012年10月から2014年12月までの計19回の活動で、ウマの世話活動に参加した71人（男子31人、女子40人）を対象とした。児童の募集は厚木市で配布される公民館だよりや市の広報等を利用して広く公募した。体験活動実施に際しては、参加児童の保護者および学生から同意書を提出してもらった。
2. 調査対象の活動：体験活動は、朝9時半に大学施設

設で参加児童の受付をした後、活動に際しての一般的な注意を与え、その後、動物を扱う上での約束（大声を出さない、走らない、勝手に触らない等）を話し、係ごとに分かれた。活動は休憩を複数回含んで2時間あまりとした。ウマ系の活動内容は、ウマについての説明、ブラッシング、馬房の掃除、天気がよければウマと学内散歩、最後にニンジンと昼飼いを給与して終了した。終了後児童はアンケートと感想文に回答し、13時ごろに解散した。2時間あまりの活動は、できるだけビデオカメラにて記録した。動物での活動にボランティアで参加した学生は動物飼養施設で動物の世話を当番制で行なう3、4年生の有志であった。3年生は4月から加入し、4～6月は4年生の活動を見学および補助し（開始期）、そして10～12月は4年生とともに活動に参加して4年生と引継ぎ（引継期）、12月に4年生が引退した2、3月は単独で行なった（独立期）。

3. 分析対象：分析対象は、ビデオに記録されたウマ係児童のウマ注視時間と、体験後に児童が記述した感想文の内容とした。71人の児童のうち分析対象となったのは、ビデオ映像で確認できた56人（男子24人、女子32人、1年生7人、2年生11人、3年生7人、4年生13人、5年生12人、6年生6人）で、このうち感想文を記述した児童は48人（男子21人、女子27人、1年生4人、2年生8人、3年生7人、4年生11人、5年生12人、6年生6人）であった。ウマ注視時間は、ニンジンを持つ手を離れた瞬間から、その後児童がウマから目を離すまでの時間をウマ注視時間（秒）として計測した。221分計189シーンに記録さ

*連絡先：a3tsuchi@nodai.ac.jp

れた 55 人分のウマ注視時間を計測し、学年や季節変動ごとに、それぞれまとめた。

結果

ウマ注視時間は、平均 1.76 秒（標準誤差 0.15）で、1 年生では平均 1.04（標準誤差 0.18）と、他の学年より短い傾向がみられた（ $\chi^2(5)=10.88, p=0.0538$ ）。学生メンバーの入替時期でみると、開始期、引継期そして独立期で明らかにウマ注視時間は異なった（ $\chi^2(2)=24.0165, p=0.0000$ ）。感想文で活動や学んだことに関して記述した児童のウマ注視時間（ 1.56 ± 0.18 ）と、活動に無関係な内容を記述した児童のウマ注視時間（ 1.84 ± 0.25 ）を比較したところ差は認められなかった。

考察

ウマ注視時間は 1 年生で他学年に比べて短いものの、学年による違いよりも実施時期に影響されることが示され、前回の報告を支持する結果となった。感想文内容と注視時間に関連性は認められず、ウマ注視時間の長さが感想文に反映されているかどうかは判断できなかった。また、ウマ注視時間は活動者の状況により影響される参加者の行為であることが示され、参加者の動物に対する行為は活動者側の何らかの要素によって影響を受けることが示唆された。

謝辞

本研究は、中山駿雄科学技術文化財団の研究助成（研 B-25-49）を受けて実施した。

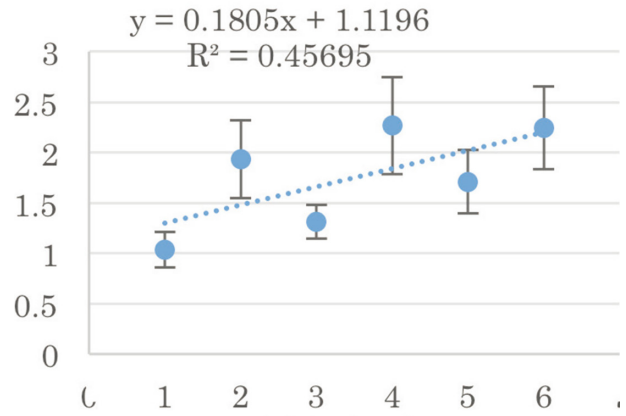


図 1 参加児童の学年

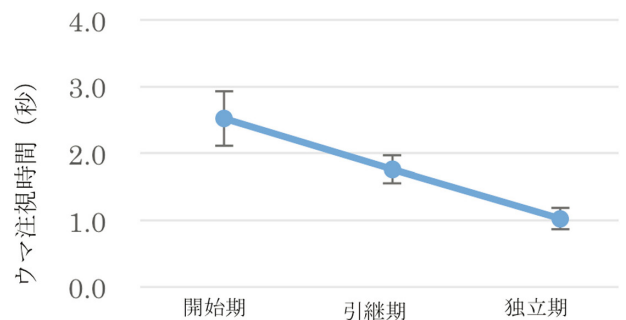


図 2 学生ボランティアの変動